

平成二十一年度 中学校入学試験問題 国語

❖ 字数制限がある問題は、「、」や「。」も一字と数えます。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

《中学生の和也^{かずや}が住む村では、毎年、穀物の豊かな実りを祈って子どもたちが踊りながら家々を回る「狐^{きつね}がえり」という祭りが行われる。この踊りのメンバーが和也の他には小学生のミヤコとサナオしかいないため、和也は都会から転校してきたばかりの同級生・三崎花子^{ささきはなこ}を誘^{さそ}っていたが、断られ続けていた。》

夏休みに入ってからというもの、僕^{ぼく}の日々は、昼は三崎^{ささき}にむげ^{むげ}に断られ、夕方はミヤコとサナオに責められるという具合に続いていた。三崎の母親はあんまり当てにならず、毎日僕は三崎に嫌^{いや}な顔をされては追い返されていた。三崎のことはなんとも思っていないとはいえ、こんなにうつつうしがられては、やっぱり気は滅^め入る。これでは、普通に学校に行っているほうが、ずっと楽だ。

「そんなんで、狐がえりに間に合うの？ もう一週間しかあらへんのに。もっと真剣^{けん}に誘ってや」

一通り練習が終わった後、ミヤコが高い声でえらそうに言った。ミヤコは怒^{おこ}ると声が高くなって早口になる。おばちゃんにそっくりだ。

「そんなん言うんやったら、ミヤコ、お前が説得してくれよ」

「嫌や。あの人、性格悪いもん」

三崎と話したこともないのに、ミヤコが言った。

「同じ年の和兄^{にい}が説得できへんのに、小学生の私の言うことなんか聞くわけないやん」

「そんなもんかなあ。でも、ミヤコは女の子同士やん。意外とうまくいくかもしれへんで」

「そんなん関係あらへん」

ミヤコの言うことは、いつも自分に都合がいい。

「ね、鮎^{あゆ}は？」

サナオが僕の短パンのすそを引っ張りながら言った。

「鮎？」

僕もミヤコも首をかしげる。

「鮎がどうしたん？」

「鮎を花子ちゃんにプレゼントするねん」

「プレゼント？」

「うん」

サナオは大きくうなずいた。

「なるほど。物で釣^つるんか」

「それって、いける！ きっと都会の人って、捕^とれたての鮎^とって食べたことないから、鮎をあげたら感激するよ」

ミヤコも目をきらきらさせはじめた。

「そやなあ」

僕は釣りたての鮎に塩を振^ふって焼き、かぶりついたときの味を思い出した。口に入れたとたん、みずみずしい身がはじける。想像するだけで、よだれが出そうになった。^①さすがの三崎も鮎には参^{まが}るに違いない。

「そうそう！ 女の子ってプレゼントされたら、すごく嬉しいもん。三崎花子やって、すぐに気分よくして、狐がえりに飛ん

できてくれるわ」

「そうそう！ 飛んできてくれるわ」

サナオはにこにこしながら、ミヤコの言葉をくり返した。

この村に流れる瀬谷川は、細くて小さい川だけど、底の岩場の様子までくっきり見えるほど水がきれいだ。山に入らないと、川にたどり着けないせいとか、都会のやつらもまだそこは汚していない。瀬谷川の鮎はほんまにおいしい。すっきりした水の中で育ったきれいな味がする。

翌日、僕たちは朝からさっそく瀬谷川に鮎を釣りに行った。うだるような暑さだけど、瀬谷川の周りは木が生い茂っているから、ひんやりと涼しい。水に足を入れると、体がしゃきつとする。

川の中には鮎の姿がちらほら見える。そのまま手を伸ばせばつかめそうだけど、そうは簡単にいかない。鮎はすぐすばしっこいのだ。それに利口だから同じ手には引っこからない。手を替え、品を替え、てきばきと釣らなくてはいけない。

僕とミヤコは鮎を追いかけては、網を張っておいた岩場に追い込み、引き上げた。サナオは身軽さを利用して、岩場の暗い陰にそっと寄っていつては、手で捕らえた。

悪戦苦闘の結果、僕たちは八匹の鮎を獲得することができた。スーパーの袋に無造作に突っ込んだ鮎は、中でまだ身体をよじっている。〈中略〉

鮎の入った袋を大事に持って、三人で三崎の家の前に並んだ。「うまくいきますように」と、ミヤコがぱちんと手を合わせた。サナオは成功することが目に見えているのか、嬉しそうにジャンプしながら三崎家のチャイムを鳴らした。

「あれ？」

三崎花子はドアを開けると、僕だけじゃないことに驚いた。

「ああ、ミヤコとサナオ。みんな狐がえりのメンバーやねん」

ミヤコは小さなお辞儀をして、サナオだけが元気よく大きな声で「こんにちは」と、挨拶をした。

「えっと、あの、これ」

僕は二人の紹介もそこそこに、すぐに鮎の入ったビニール袋を三崎に差し出した。

「何？」

「三人で釣ったんや。あげるわ」

三崎はけげんそうに袋を受け取った。ミヤコもサナオも、わくわくした顔で三崎を見つめている。ところが、三崎は中を見たとたん、小さな悲鳴を上げ、鮎の入った袋を地面に落とした。

「なんや。そないに驚かんといて」

僕は突然のプレゼントに驚いたのかと思い、鮎の入った袋を拾うと、もう一度、三崎に渡そうとした。だけど、三崎は手を出そうともしない。

「いや、こんなのいらない」

「へ？」

僕たちは予想外の三崎の反応に戸惑った。三崎が遠慮していると思ったサナオが「大丈夫。全部あげるから」と言って、三崎の手を取り、鮎の袋を握らせようとした。しかし、三崎は手を固く握って、受け取ろうとはしない。

「そんなの気持ち悪い」

三崎はうつむいたまま言った。

「何も気持ち悪くないって、鮎やんか。汚いもんやないで。今日、朝からみんなで釣ってん。新鮮やし、うまいんやで」

「いらないよ。そんなの」

「そう言わんと。食べてえな」

僕がもう一度、袋を三崎に押し付けると、

「気持ち悪い。絶対無理！」

と、三崎は右手で袋を払いのけた。その弾みで袋は勢いよく落下し、中から何匹かの鮎が飛びだした。土に投げ出された鮎は、なんとも情けない格好をしている。その様子にびっくりしたのか、鮎を断られてショックだったのか、突然サナオが泣きだした。

「いや、あの、ほら、生の魚ってあんまり見ないから……」

三崎が、しゃくりあげるサナオにおろおろしながら声をかけた。

「ほんま、あんたって最悪や。ひどいことばかりしよる。あんたなんか、こっから出て行ったらええのに」

今まで黙っていたミヤコは、三崎の顔をにらみつけて怒鳴った。そして、サナオの手をとって、走り出した。

「ちょっと、ミヤコ、待ってや」

ミヤコは僕が声をかけても振り返らず、泣いているサナオを強引に引っ張りながら、走っていつてしまった。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。うまくいくはずだったのに、大失敗だ。三崎もミヤコもサナオも、みんな気を悪くしてしまった。物で釣ろうとした姑息な手段がだめだったのだろうか。

三崎はサナオに泣かれ、ミヤコにでかい声で怒鳴られて、^②ほんやりと立っていた。これでは狐がえりに誘うところではない。

「気にせんといて」

僕はそう言い残して、鮎を拾い集めると、ミヤコたちの後を追いかけた。

ミヤコもサナオも相当傷ついたのか、みんなで分けようと言ったのに、「もう鮎なんて食べたくもない」と受け取らなかった。仕方なく、八匹の鮎を持って帰ると、母ちゃんも姉ちゃんもとても喜んだ。夕飯のおかずが僕が釣った鮎だと知ると、遊んでいる暇があつたら勉強しろと、いつも怒っている父ちゃんまでも「でかした」とほめてくれた。

どうしてみんな鮎を喜んでくれるのに、三崎はにこりともせず怒るのだろうか。本当に都会っ子の考えていることはわからない。

僕がぶつぶつ言いながら鮎をかじっていると、姉ちゃんが笑った。

「ほら、『都会のねずみと田舎のねずみ』って絵本があるやない。あんたが子どものときよく読んでたやつ」

「それがどないしたんや」

その絵本は覚えている。田舎で暮らしているねずみと都会で暮らしているねずみが、それぞれ互いの住みかをうらやましがって、住みかを交換する。だけど、いざ生活してみると、ちっとも楽しくない。都会のねずみは都会じゃないと生きていけないし、田舎のねずみは田舎が一番居心地がいいという話だ。

「それと一緒やん。喜ぶことはそれぞれ違うってこと」

「なんや。こんなうまいもん、喜ばへんのがわからんわ」

捕れたての鮎は、焼くと皮はパリッとして、味が濃く、苦味までもがすっきりしておいしい。

「まったく子どもやね」

三つしか歳が変わらないのに、姉ちゃんはえらそうに言った。

「和也かって、いきなりハイテクコンピューターをもらっても、困るやろう」

「それは嬉しいで」

「じゃあ、マクドナルドの商品券は？」

「そんなもん、店がこっら辺にないのにいらんわ」

「ほらごらん。それと一緒にやって。鮎かって、いらん人はいらんのやって。受け口やし不細工な顔した魚やねんもん」
「なんやねん。そんな鮎に失礼や」

僕は鮎の代わりに、姉ちゃんに怒ってやった。鮎は頭だっけいいし、色のきれいなかわいい魚だ。
「和也だっけさ、街に行つて突然、妙な祭りに参加させられたら、うんざりするはずや。最近の和也って、都会のものは都会のものはって、なんか年寄りみたいやよ」

鮎とマクドナルドの商品券がどう一緒なのかさっぱりわからないし、狐がえりは妙な祭りではない。そう言い返そうと思つたけど、残念ながら姉ちゃんの言うことには一理ある。^③

都会の中学生と田舎の中学生は、ねずみほどじゃないけど、やっぱり違いはある。僕にとってすごく貴重なものでも、三崎にとっては気味悪いものなのかもしれない。狐がえりだっけ、それと一緒に。僕は昔からやってるから疑問もないけど、三崎からしたらすごい変なことかもしれない。

僕は都会に転校して、毎日ヤンキー風の中学生に「一緒にヒップホップダンスを踊ろうぜ」と誘われている自分を想像してみた。それは、とんでもなくうつとしい。そのうえ、都会にだけ生息している不気味な生き物を、おいしいから食えと、集団で持つてこられたら、やっぱり引いてしまう。こっそり田舎に引き返してしまいたくなるはずだ。

きつと、三崎だっけ、毎日、田舎丸出しの僕にわけのわからない祭りに誘われ、嫌な思いをしていたに違いない。^④最近の僕は、狐がえりに踊らされてしまつていた。^⑤僕はそう考えると、じつとしていられなくなった。

(瀬尾まいこ『狐フェスティバル』)

問一 くく線 a 「むげに」・くく線 b 「けげんそうに」の本文中の意味として最もふさわしいものをそれぞれ次のア～エから選び、記号で答えなさい。

a むげに		b けげんそうに	
ア	冷たく	ア	わくわくしながら
イ	むっとして	イ	不愉快そうに
ウ	すまなそうに	ウ	不思議そうに
エ	ひどく	エ	おどおどしながら

問二 線①「さすがの三崎も鮎には参る」とありますが、これはどういうことですか。説明しなさい。

問三 線②「ぼんやりと立っていた」とありますが、この時の三崎の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア なぜ突然子どもたちに泣かれたり、怒鳴られたりするのかわからず、当惑する気持ち。
- イ とんでもないことをしてしまったと後悔し、自己嫌悪におちいる気持ち。
- ウ そのつもりはないのに相手を傷つけたことに気づき、呆然とする気持ち。
- エ 三人の一途な思いに感動し、自分が折れた方がよいのではないかと迷う気持ち。

問四 線③「姉ちゃんの言うことには一理ある」とありますが、その内容を述べているところを本文中より十字から十五字の間で抜き出しなさい。

のような音節文字とアルファベットの^{〔注2〕}ような音素文字に区分することもある。

文字を中心に考えるこの区分はあまり実りがあるようには思えない。なぜなら、日本語は表意文字・漢字と、表音文字・仮名で組み立てられるといったって何も見えてこない。そうではなくて、文字で聞き、文字で話すところの文字中心型の言葉と、音声で聞き、音声で話すところの音声中心型の言葉があり、^b前者に中国文字・漢字が深くかかわっているということだ。つい最近まで、表意文字から表音文字への移行が文字の進化として語られた時代があり、ローマ字論者、仮名書き論者がいた。しかし、文字を言葉からとらえ返した時、逆の言い方も可能になる。

人類が誕生した時から、言葉は音声であった。だから言葉の中核は^{かく}今も書き言葉ではなく、話し言葉である。西欧語は、文字を獲得した後も音声中心型の構造を変えていない。つまり西欧語においては、文字の誕生によっても音声中心型は変わらなかった。ところが、中国語や日本語では、文字を獲得してからは、言葉の構造の中に文字が割^しりこみ、言葉の中央を占^しめ、文字中心型の言葉へと転じた。文字の獲得という新しい文化段階を抱え込んで、音声言語から文字言語への革命があったという意味で、^⑤西欧語よりも進化した言葉ということだって可能なのだ。

(石川九楊『書字ノススメ』)

〔注1〕 西欧……ヨーロッパ

〔注2〕 音素文字……一字が一音素(音の最小の単位)を表す表音文字。

問一 ― 線①「肩すかしを食って」とありますが、この言葉の使い方として、最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 優勝候補のチームと聞いていたので、覚悟^こして試合に臨^{のぞ}んだら、肩すかしを食ってあっさり勝ってしまった。
- イ 天気予報で晴^はれだったので、傘^{かさ}を持たずに出かけたが、肩すかしを食ってかなり激しい雨に降られてしまった。
- ウ 絶対に予算内に収めるつもりで買い物に出かけたが、肩すかしを食って結局予算を大きく超^こえてしまった。
- エ 児童会の選挙で、今まで何の委員にもついていたことのない私が、肩すかしを食って会長に選ばれてしまった。

問二 ― 線②「ヤマモトイチロウ」という半端な片仮名の宛名で、封書を平気で送ってくるのは解^とせない」とありますが、なぜ「片仮名の宛名」は「半端」なのですか。「日本語は」に続く形で理由を答えなさい。

問三 ― 線③「西欧語の音声は片仮名の網目ではなかなかすくいとれない」とありますが、このことと同じ状況^{きつう}を表しているものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 「ボタン」や「カルタ」は日本語のように見えるが、じつは外国語である。
- イ 機械の「マシン」と縫^ぬい物に使う「ミシン」は、同じ発音の英語の言葉からできた外来語である。
- ウ 日本語で犬の鳴き声は「ワンワン」と発音されるが、英語では「バウアウ」と発音される。
- エ 日本人は、外国語を片仮名で表記して日本語に取り込み、まるで最初から日本語だったように使いこなす。

問四 ―線④「厳密には講演は成立しない」とありますが、どのようにしたら講演を成立させることができますか。次のア～エから講演の成立に近いものを選び、記号で答えなさい。

- ア 聴き手が、講演者の演説原稿を見ながら聴く。
- イ 講演者が、できるだけゆっくり話す。
- ウ 聴き手が、辞書を引きながら聴く。
- エ 聴き手が、講演内容の下調べをしてから聴く。

問五 ―線⑤「西欧語よりも進化した言葉ということだって可能なのだ」とありますが、中国語や日本語が西欧語より進化しているといえるのはどうしてですか。本文中の言葉を用いながら八十字以内で答えなさい。

問六 ―線a「両者」・―線b「前者」とは、それぞれ何を指していますか。本文中の言葉を用いて答えなさい。

問七 空欄Ⅰ・Ⅱにあてはまる接続詞を、それぞれ次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア そして イ しかし ウ なぜなら エ だから オ また

問八 左の文章は本文の内容をまとめたものです。この文章の空欄(①)～(⑤)に本文中の言葉を当てはめて、文章を完成させなさい。

日本語では、人と話をしているときも、言葉の音声だけでなくその言葉がどのような漢字であるかを思い浮かべながら言葉を聞く習慣がある。これは日本語が、西欧語の(①)や日本語の片仮名のような(②)文字ではなく、基本的に(③)に代表される(④)文字を使いながら「(⑤)で聞き、話す」言葉だからである。

三 次の四字熟語の□に当てはまる漢字を答え、それぞれの熟語の意味を次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ① □言実行
- ② 針小□大
- ③ 用意□到
- ④ 空前□後
- ⑤ 自□自賛

- ア 自分のした行為を自分でほめること。
- イ 準備が行き届いて、手ぬかりがないこと。
- ウ 文句や理屈を言わず、黙って成すべきことを行うこと。
- エ 過去に例がなく、将来もありえそうにないこと。
- オ 小さなことを、大げさに言い立てること。